

令和元年5月28日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04804

研究課題名（和文）高機能自閉スペクトラム症当事者の性行動に関する尺度の開発

研究課題名（英文）Assessment of sexual behaviors in autism spectrum disorders

研究代表者

萩原 拓 (Hagiwara, Taku)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：00431388

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、高機能自閉スペクトラム症（HFASD）当事者の性行動に関するアセスメント手段を検討した。国際的には、定型発達と比べて顕著なHFASDの性発達や性行動の特異性は認められておらず、ソーシャルスキルや日常生活スキルなど、適応行動全般に含まれる適応課題や困難性と捉えるべきである。HFASD当事者や家族、支援者に対する調査結果から、HFASDの性行動アセスメントは、複数の標準化尺度によるアセスメント・バッテリーによる包括的アセスメントから性行動問題の有無、または将来的に問題となりうる可能性を分析し、さらに詳細なアセスメントはチェックリストによる半構造化面接を実施するアプローチを構成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

HFASDの診断は増加傾向であり、また成人期当事者の日常生活困難に対する対策も喫緊の課題となっている。これらは、特別支援教育による教育環境を中心とした支援のみならず、学齢期後の福祉支援も含めたライフステージを通じた支援体制が必要である。性行動問題は触れられにくく、また見えにくい課題ではあるが、顕著な問題として顕在化した場合、当事者やその家族の日常生活に与えるネガティブ・インパクトは非常に大きなものとなる。本研究で構成した包括的アセスメントを基盤としたアプローチは、これからのHFASDのアセスメント及び支援の可能性を広げるものであると考える。

研究成果の概要（英文）：Current study investigated assessment process of sexual behaviors in high functioning autism spectrum disorders (HFASD). At this time, reported research findings indicated that no marked atypicality related to sexual development or behaviors has been specified in those population. Thus, problems of sexual behavior in HFASD should be considered as a part of overall adaptive problems which include social skills or daily living skills. Based on the results of interviews and questionnaires conducted for individuals with HFASD, their families and supporters, comprehensive assessment approach consisted of formal assessment battery followed by semi-structured interview checklist was developed to evaluate problems and support needs related to sexual behaviors in HFASD.

研究分野：社会科学

キーワード：自閉スペクトラム症

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

(1) 自閉スペクトラム症（ASD）には、特異的社会的コミュニケーション及びスキル、そして限定的・反復的行動、興味、活動という2つの中核的特性が知的障害の有無に関わらず、連続的に存在していると捉えられている（APA, 2013）。ASDは、現時点では脳機能不全など機能的欠陥が直接的原因とされていないが、これらの特性を持つ個人が一般的ないし特定の環境にある場合に、困難性や障害となる事象が発生しやすい。ASDの他に発達障害に含まれる症状は、限局的学習症（LD）、注意欠如・多動症（ADHD）、発達性協調運動症（DCD）があるが、個人において単独でこれらの症状が見られることは少なく、多くの場合他の発達障害領域の症状が合併している。いずれの場合においてもASD症状が存在する場合、その中核的特性によって社会的な日常生活に顕著な困難性や障害がライフステージを通して継続する可能性がある。特に、知的障害を持たない高機能ASD（HFASD）当事者は、平均またはそれ以上の知的機能よりも低い適応行動レベルであることが多く、日常生活における困難性の高さは成人期の社会的自立に直接的に影響しており、喫緊の支援体制の充実が必要とされている。しかし、ASDに関する研究や支援はこの10年で飛躍的に進歩していることは事実である。診断の精度向上による早期発見、特別支援教育措置の充実、成人期の生活支援や就労継続支援など多岐にわたり、必ずしも十分とは言えないが着実に進化を遂げていると言って良い。

(2) ASD当事者のQOL（生活の質）の維持・向上への関心は、最近ようやく高まってきたと言える。個人のQOLを中心とした支援アプローチはアメリカなどでは知的障害を中心にかなり実践が進められているが、HFASDに関してはそのアプローチのニーズは認められていても、具体的な研究や実践はまだ初期段階と言って良い。セクシュアリティや性行動はQOLに密接に関連しており、世界保健機関（WHO）においても、性生活の充実に関する項目はそのQOL尺度であるWHOQOL26（WHO, 2007）にも含まれている。残念ながら、わが国における性の健康度や性教育に関する関心は国際的に見ても先端を行くものではない。さらに、障害を持つ人々に対しての研究や実践は寡少である。

(3) 本研究の前段階として、これまでHFASD当事者の性行動に関する調査研究を行ってきた。主に、①国内外のASDおよび近接領域障害の性発達、性教育、また性的問題に関する研究、実践の精査、②HFASDに特化した実態調査、③調査結果を踏まえた、アセスメント、性教育プログラムの要因の割り出し、④性的問題、性被害、性加害につながる特性・要因の分析の4点において研究活動を展開してきた。これまでの研究からまず言えることは、定型発達に比べて身体的・生理的発達に大きな違いが見られないのに関わらず、HFASDのセクシュアリティ及び性行動が定型発達と大きく異なるのはその中核特性である、社会的コミュニケーションの特異性に大きく影響を受けていることである。つまり、乳幼児期から学齢期にかけてほとんどのHFASD当事者は定型発達と同じ環境（通常学級など）で過ごすわけではあるが、定型発達と同様の社会的知識獲得、また社会的経験が来ているわけではなく、そのために性行動の発達が直接的影響を受けることは明白である。さらに、適応行動レベルの低さによっても、HFASD当事者の性行動の発達、知識獲得、成功・失敗体験が少ないであろうことも説明可能である。しかし、これらだけでHFASDの性行動特性がすべて説明できるわけではない。

(4) 性行動は社会的なものと捉えられているが、身体的交渉も多く含むため、「感じ方」、つまり感覚処理の影響も大きいと思われる。本研究代表者のこれまでの研究におけるHFASD当事者からのインタビューから、多くの当事者が感覚処理に特異性を持っていることが推測された。当事者全体に感覚特異性のパターンが見られるわけではなく、感覚関連の困難性は非常に幅広いものではあるが、触覚や視聴覚の過敏性や特定の感覚刺激の不足によって自己不安定になるなどの報告が得られた。このような感覚特異性はDSM-5（APA, 2013）の診断基準にも新たに加えられており、日常生活に負の影響を及ぼしていることが推察される。この感覚特異性は、HFASD当事者の適応行動レベルの低さを説明する重要な要因であると推察できると同時に、彼らの性行動を制限し、また特異なものとしている可能性も高いことが示唆される。

2. 研究の目的

(1) 本研究は当初、HFASD当事者のライフステージを通じた性行動を評価するアセスメント・ツールの開発を目的とした。ツールは対象者に応じて他者評価および自己評価が可能なチェックリストを想定した。このアセスメントは、ライフステージを通じたHFASD当事者の性行動に関する具体的評価とリスクインジケータの役割を果たす。

(2) HFASD当事者の性行動に関する問題に大きく関与していると思われる適応行動レベルおよび感覚処理特性を含めた包括的なアセスメントを検討することにより、当事者の日常生活における具体的支援計画策定の可能性を模索する。

3. 研究の方法

(1) 性行動を中心としたASD特性および支援に関わる、最新の国際的研究動向の調査：英語論文・書籍を中心とした文献調査および国際学会において情報収集を行った。

(2) HFASD 当事者の性に関する特性および困難性の把握：他者評価および自己評価形式によるアンケート、当事者および支援者へのインタビューを中心に性的発達、衛生関連スキル、自己認知、性的社会性、性的不適応行動や困難性などについての情報収集を行った。

(3) アセスメント・バッテリーによる特性把握：ウェクスラー式知能検査（WISC-IV、WAIS-III）、Vineland-II 適応行動尺度、感覚プロファイル・シリーズ（SP、AASP）、親面接式自閉スペクトラム症評定尺度（PARS-TR）、Conners-3（ADHD 評価スケール）を対象者によって調整し実施した。

(4) 包括的アセスメントの一環として、性行動のチェックリストおよび支援につながるプロセスを上記のデータを基に考察・検討した。

4. 研究成果

(1) 最新の HFASD 当事者の性に関する国際的研究の動向：昨今、日本でもその傾向は見られているが、英語圏を中心に HFASD 当事者向けの性に関する書籍が多く出版されるようになってきた。以前は当事者による手記や事例集のような中で若干触れられる程度であったが、現在は HFASD の性を中心とした内容の文献が出版されている。それらが対象としている年齢層は青年期が多くを占めており、保護者や支援者が参考とする形式のものが一般的ではあるが、青年期の当事者自身が読んで学べるような構成がされている文献も少なくない。性行動は社会的行動の一環と捉えられていることから、これまでの研究・実践によって効果が確認されてきたソーシャルスキル支援の手法を応用が主流となっている。具体的にはまず、イラストなど視覚的情報を多く取り入れ、当事者が具体的に理解しやすい工夫がされている。さらに、ソーシャル・ナラティブのようにストーリー性を持たせ、当事者自身の日常生活に当てはめやすいような社会的場面把握が促されている。さらに、当事者自身や周りの人が望む結果となるような問題解決手順が示される。

これらの文献は、HFASD の性行動を主題としたものであるが、ソーシャルスキルをはじめとする適応行動に関する支援マニュアルと捉えることが出来る。つまり、従来の ASD 当事者の日常生活支援では性に関する内容が抜けていたという見方も可能であり、性行動に特化したものではなく、性行動も含めた適応行動支援プログラムが現在の当事者のニーズに適していると考えられる。

HFASD の性行動に関する研究は若干の増加傾向にあると思われるが、これまでと同様、特性や支援の方向は未だ結論に至っていないのが現状である。国際学会等における発達障害の性に関する発表やディスカッションは顕著に増加しており、それらのセッションに参加する研究者や支援者の数も他のトピックに比べて多い印象を受けた。性行動に関連する問題行動についての報告は寡少であり、HFASD 当事者の性差、性指向、恋愛、性的欲求などの実態把握が中心となっている。これまで、多くの調査で HFASD 当事者の性行動は、定型発達者と統計的差異はないことが報告されている。つまり、恋愛感情、性的関心、自慰を含む性行為などは一般的レベルと言える。一方で、性に関する情報や性教育による知識が少ない傾向にあることも指摘されている。これは、ASD の対人関係をはじめとする社会性困難が直接的に影響していることが考えられる。他者との性的な関わりの少なさからか、定型発達よりも自慰行為が高めであるデータもあれば、ほぼ平均的な性交渉であるというデータもある。しかし、特異的な性行動が ASD の特性として認められたという報告はない。恋愛交際においても、定型発達に比べて困難であるという傾向は見られるが、顕著にその傾向を示したものはなく、一般とそれほど変わりはないという見解がある。ただ、これは性行動に限ったことではないが、近年発達障害支援の視点が適応行動に向けられるようになったことから、当事者の QOL(生活の質)への関心も高くなってきた。傾向としては、ASD 当事者の QOL は定型発達者よりも低い。しかし、これはサンプルである被支援者の状態が大きく影響し、多くの被支援者はそれぞれのライフステージでのネガティブ体験が多い。また、実際的な生活上の困難や QOL に対する自己認知のレベルも影響する。また、書籍においても見られる傾向であるが、対象はより女性に焦点を当てた調査が目立っている。男性に比べて女性当事者の方が困難性の顕在化が遅く、そのため診断年齢も高くなり、医療ケアや支援が開始するまで性的被害を受け続けていることが多い。現在、ASD の男女比は縮まっている傾向を示している。つまり、これまでの統計よりも女性当事者は潜在的に多い可能性が高まっており、この動向からも女性当事者への学術的関心が向けられていると思われる。

これまでの研究や調査報告から、確定的ではないが、ASD 当事者の性行動や性発達は概ね定型的であることがわかる。一方で、QOL などの日常生活上の満足や充足感は低い可能性がある。生活環境で顕著な、また犯罪につながるような特異的な性的傾向を示すケースは確かに存在するが、それらは ASD に共通する特性とは言えないのではないだろうか。つまり、性行動という限定された領域ではなく、ソーシャルスキルや日常生活スキルに含まれた形での QOL や適応、または困難という捉え方が必要だと思われる。

(2) 包括的アプローチによる HFASD 当事者の性行動のアセスメント：①本研究の当初は、HFASD 当事者の性行動特性の把握にフォーマル・アセスメント・ツールを開発し用いることを計画していた。研究期間中、当事者やその家族、支援者からのアンケートやインタビュー、性行動に関わる問題行動や犯罪のケースなどのデータを分析し、支援につながるアセスメント手段を模索した。その結果、HFASD 当事者の性行動特性を尺度評価することは困難であるとの結論に達した。その理由の第一点は、HFASD 当事者、およびその家族、支援者などの他者による当事者自身の性行動に対する気づきが低いことが挙げられる。国際的に見ても、日本は日常的会話において性についてオープンに話すことが少なく、性教育のレベルも低い。特性として社会的関わりが少ない HFASD 当事者においては、その傾向はさらに減少する。また、家庭内で性的発達や性的欲求が日常的に注目されることも少ない。第二点は、本研究の他者評価による調査結果を分析したところ、HFASD 当事者の性行動に関する課題は、それほど顕著には指摘されていなかった。その中で最も目立った課題は他者に近づきすぎるとのパーソナルスペースの課題であったが、他者に戸惑いや若干の不快感を与えることはあっても、対人関係において深刻な問題となったものはなかった。また、他者に触れやすい傾向も見られたが、これは主に学齢期までの傾向であり、青年・成人期には目立たなくなる。アニメなどのフィクションの世界にファンタジーを持つ傾向はあるが、そこに強い恋愛感情や性的欲求を示すケースは稀であり、実生活で特異的な問題となったものはなかった。これらから、HFASD 当事者の性行動は一般とさほど変わらないことが考えられる。別の見方をすれば、日常的には見えにくい、または気づきにくい。第三点として、性犯罪につながったケースの多くでは、性行動問題は日常的に見られていない。つまり、顕著な対人関係の悪化や性犯罪などの形で顕在化した段階で初めて、本人の性行動の特異性が指摘される。また、確固とした意図を持った計画的な犯行というよりは衝動的な振る舞いが目立ち、自分の行為が相手にどのような影響を与え、また自身や家族に及ぼす結果が推測されていないことが多い。このような場合、潜在的な性行動問題について尺度的に危険度レベルを測定し予防することは極めて困難である。さらに、性行動の「危険度」を数値化することによって、当事者やその家族の日常生活ストレスは増加するであろうことは否めない。以上のことから、HFASD 当事者の性行動アセスメントは、適応行動や感覚処理領域を中心とした包括的アセスメントの一環として実施し、その結果から性行動問題につながる可能性が示唆される場合にチェックリストを用いるアプローチが適していると考えた。つまり、性行動問題の有無を明確化するよりも、より当事者の生活環境に適した振る舞いへ導く示唆や代替的措置を考える支援を目指す。

②包括的アセスメントは、HFASD 当事者の特性を全体的に捉えるものであり、診断時、支援開始時、定期検査などで実施されるものである。標準化尺度などフォーマル・アセスメントが中心であり、現在出版されている検査では以下のようなアセスメント・バッテリーの構成が可能である。

- ・ASD 特性スクリーニング (PARS-TR など)
- ・認知機能 (ウェクスラー式知能検査など)
- ・適応行動 (Vineland-II など)
- ・感覚処理 (感覚プロファイル・シリーズなど)
- ・行動特性 (CBCL など)
- ・その他対象者に合わせた検査

これらの検査からは、それぞれが意図する領域においての標準化評価結果を得ることができ、複数の検査結果を総合的に考察することによって、よりの確かな当事者の特性把握、問題特定が可能となり、当事者の生活環境に即した支援策定につながる。また、これらの検査から直接的に性行動問題を指摘することは困難であるが、特に性行動問題に関係する適応行動および感覚処理の両領域では、以下のような点について性行動問題の存在を分析することが可能である。

- 適応行動（主に Vineland-II 適応行動尺度）における注目点
- コミュニケーション領域
- ・受容言語（他者の発言を字義通りに捉える）
 - ・表出言語（自身の経験を詳細に話す）
- 日常生活スキル領域
- ・身辺自立（入浴スキル、衛生管理）
 - ・地域生活（金銭管理、日常生活において自身を擁護する権利の理解とその適切な行使）
- 社会性領域
- ・対人関係（他者感情の認識・気遣い、他者との協調、自身の感情理解、自身の振る舞いが他者へ与える影響の推測）
 - ・遊びと余暇（他者を交えた余暇活動の頻度、自身にとって適切な集団環境の認識）

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

- ・コーピングスキル（謝罪が必要である場合の認識と適切な謝罪、ストレス・マネジメント、状況や環境における危険察知と回避、からかいに対する許容、個人情報等秘密の保持）
- ・不適応行動（高レベルの内在化・外在化問題、不適切な性的行動、固執性、自傷行為、過度の恐怖感）

感覚処理（主に感覚プロファイル・シリーズ）における注目点

- ・触覚、聴覚、嗅覚などの感覚過敏による社会的接触の困難や環境の回避
- ・触覚、口腔感覚などの感覚探求行動の著しい頻度と強度、固執性
- ・特異的な感覚探求行動の存在

以上の注目点について顕著な傾向が見られた場合、またアセスメント時の主訴に性行動問題が含まれている場合、以下のような項目を含むチェックリストを用いた、半構造化面接を実施する。

ソーシャル・インタラクション

- ・他者との距離が近すぎる
- ・他者によく触れる
- ・性に関する言語を日常会話で頻繁に使う
- ・相手の発言を字義通りに受け取る
- ・相手の意見に従う（流されやすい）
- ・メディアのふるまいや格好をそのまま真似る（特に肌を露出する服装など）

自身の認識

- ・自身について過剰な自信または劣等感（他者の意見に反して）
- ・メディアの情報をそのまま真実と受け止める

衛生管理

- ・入浴、洗顔、歯磨きが不規則
- ・入浴、洗顔、歯磨き、着替えを極端に嫌う、拒否する
- ・自身の臭い、服の汚れに無頓着

生活

- ・一人暮らし、または家族や支援者の支援や管理が十分ではない
- ・家族や同居者、支援者の過干渉
- ・家族や同居者、支援者の生活基準に従う（自身の方針がない）
- ・風呂場など以外で裸体を他者に晒すことを厭わない
- ・自室や風呂場以外で全裸になる

恋愛

- ・恋愛観・性知識は主に情報メディア（主にインターネット）やフィクションがベース
- ・同年代の他者との恋愛や性に関する会話が少ない、回避する、疎外される
- ・メディアの恋愛・性描写を過剰に嫌う
- ・アニメなどファンタジーの世界のみに対してしか恋愛感情を示さない
- ・他者との恋愛経験はないが、恋愛経験への強い憧れ

性的欲求

- ・日常生活に影響するほどの極端な頻度・強度
- ・他者が気づく、または他者から見える場所での自慰行為
- ・フェチズムの有無
- ・膨大な性的な画像や書籍の蒐集
- ・アダルトビデオなどを手本とした性的干渉、性行為
- ・周りの人やフィクションのように恋愛や性交渉ができないことへの過剰な嫉妬や劣等感の表出

③支援に向けて：これまでの調査から、性行動問題が主訴であり、また早急に支援実施が必要なケースは極めて少ないと思われる。しかし、上記のような包括的アセスメントによって、性行動問題の存在、また将来に向けて性行動に関わる支援の必要性が把握可能である。性行動は社会的活動であり、様々な適応行動課題が関連している。つまり、性行動のみに焦点を当てるのではなく、当事者日常生活全般の支援が必要である。よって支援手段に関しては、性行動に特化したものではなく、ソーシャルスキル支援や Positive Behavior Support などのテクニックを利用し、適応行動支援の一環として当事者個人の性行動特性に合わせた支援を実施していく。

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

<引用文献>

田崎美弥子、中根允文日本版監修、WHOQOL26 手引、金子書房、2007

辻井正次、村上隆日本版監修、黒田美保、伊藤大幸、萩原拓、染木史緒日本版作成、日本版 Vineland-II 適応行動尺度マニュアル、日本文化科学社、2014

辻井正次、村上隆日本版監修、萩原拓、岩永竜一郎、伊藤大幸日本版作成、日本版感覚プロフィールマニュアル、日本文化科学社、2015

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計1件）

- ① 萩原 拓、大人の生活を楽しむために本人の性に対し家族はどう付き合えば良いのか、アスペ・ハート、49 巻、2019、46-48

〔学会発表〕（計3件）

- ① 三宅 篤子、金井 智恵子、黒田 美保、萩原 拓、成人自閉スペクトラム症の女性への発達支援プログラム～自閉スペクトラム症女性の障害特性に注目して～、日本発達心理学会第29回大会、2017
- ② 萩原 拓、成人期の発達障害、弘前大学子どもこころの発達研究センター研修(招待講演)、2017
- ③ 三宅 篤子、黒田 美保、萩原 拓、藤野 博、日戸 由刈、秦野 悦子、発達障害児へのアセスメントから支援につなぐには、日本発達心理学会第27回大会、2016

※科研究による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。